

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 25 日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381059

研究課題名(和文) 教職に対する省察を促すプログラム開発：イメージマップと語りの活用を通して

研究課題名(英文) The development of program promoting reflection to teaching profession: through using teachers' image maps and narratives

研究代表者

森 久佳 (MORI, Hisayoshi)

大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：00413287

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、専門職の力量として求められる教職に対する「省察(reflection)」の深化を促すプログラムを開発することである。「省察」の理論的動向の整理・検討を行い、本研究テーマに沿った内容で演習型講義を計画・実施し、その講義の様子の撮影及び参加したアンケート、インタビュー等を行うことによって、その学生たちの「省察」の深まりを検討した。
以上の結果、これからの教職の専門的力量をとらえる上で「社会正義(social justice)」の観点を欠かすことができないこと、そして、この観点を盛り込んだテーマについて学びを進めることによって、教職に対する「省察」は深化していくことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to develop the program promoting the capacity of deliberative "reflection" to teaching profession required as professional capacity. We reviewed the literatures on reflection, planned and implemented lectures in line with theme of our research, and analyzed the images of the lectures captured by video camera, the date of questionnaires for the student attending the lectures and interview for some of the students. We examined, through such research actions, the depth of their reflection.
We made clear, after all, that the viewpoint of "social justice" is inevitable for questioning current teaching profession, and that leaning about themes along with the viewpoint leads teachers to deepen their capacity of reflection on teaching professions.

研究分野：教育学

キーワード：教育学

1. 研究開始当初の背景

今日、国内外を問わず、「省察」の力量を高めることは教職にとって必須の課題である(N.Lyons 2010 *Handbook of Reflection and Reflective Inquiry*. Springer.)。そこで目指されている「省察的実践家 reflective practitioner」という専門家は、いつでもどこでも確実にうまくいく「技術」の応用によって職務を遂行しているものではなく、複雑で時に偶然性に満ちた実践の文脈を細かに捉え、その意味するところを多面的に解釈することによって、課題と新たな解決策の発見に努めようとするものである。知識基盤社会の到来に伴い、教職をより高度で複雑なものとして捉える見方が広く浸透しつつある今日において、これからの教員は「省察的実践家」であること、つまり、探究、向上、セルフモニタリングを継続的に行い、自らの専門家としての学びそのものについて「省察」する力量を形成することが求められている(A.Hargreaves 2003 *Teaching in the Knowledge Society*. Teachers College Press)。

こうした研究動向において、「省察」の捉え方も、授業の方法や技術のレベルから、教員自身の人生の来歴を含む重層的なものへと大きく発展してきた。「省察」は、実践の良し悪しを判定し、解決すべき課題を発見するためだけに行われるのではなく、自らの実践を成り立たせている信念や価値判断に気づき、教員としての自己を再構築(re-framing)していくプロセスとして捉えられてきたのである(M・V・Manen 1991 "Reflectivity and the Pedagogical Moment," *Journal of Curriculum Studies* 23(6))。

この自己の再構築という点は、教師の力量形成及び教職アイデンティティの形成とも密接に関わる。教師の力量形成モデルは、教職を通して形成してきた実践スタイルの解体・再編を伴う非連続的なものであり、時に停滞ともいえる局面を含むプロセスとされる(グループ・ディダクティカ編 2012『教師になること、教師であり続けること』勁草書房)。それゆえ、こうしたモデルにおいては、実践スタイルの基盤となる暗黙的な自己の信念や価値観を浮き彫りにし、彼・彼女らにそれらを自覚させ問い直しさせることが「省察」となる(越智康詞 2004「教職の専門性における『反省の』の意義についての反省」『信州大学教育学部紀要』112)。

このような「省察」は、教職人生における挫折やバーンアウトといった、教職のアイデンティティ・クライシスの観点とも繋がるものであり、この点にこそ本研究の意図がある。その意図とは、授業方法や技術といったレベルを超えて、自己の教職アイデンティティの確認及び再構築に迫ることができるといったような、教職に対する「省察」の深化を促

す、ということである。

こうした「省察」の深化に関する先行研究として、教員のライフヒストリー、ライフストーリー、ライフコース等の諸研究が挙げられる。これらの研究は、自己の歴史に関する教員の個人的な「語り(narrative)」や「物語(story)」を聞き取る手法を通して、教員自身の教職観を問い直す(=「省察」する)ことを可能としてきた(山崎準二 2012『教師の発達と力量形成』創風社など)。

しかし、これらの手法は教員個人のレベルにとどまっており、校内研修や現職研修といった場において適用可能なものとはなっていない。同僚等の教員同士による「専門職として学び合う共同体(Professional Learning Community)」の形成が重視されている今日において(例えば、福井大学教育実践研究会編 2011『専門職として学び合う教師たち』エクシート)、校内研修や現職研修に参加する教員を対象に、彼・彼女らの自己の信念や価値観を自覚させ、問い直させる「省察」の深化を図るプログラムの開発は、喫緊に対処すべき研究課題である。また、その実現のためには、教員が複数集う校内研修や現職研修という場に適した形で、教師個人々の「語り」を触発し、かつ集団内でそれを展開・共有することで「省察」を深化させるツールの選定や開発も必要となる。

この点は、本研究代表・分担者らのこれまでの研究成果を踏まえ着想に至った経緯とも関わる。本研究代表・分担者らは、これまで、教員志望学生及び現職教員自身の抱く教職に関する信念の構造とその特色を解明してきた(平成21~23年度基盤研究C)。ここでは、学生や教員たちに、教師にとって必要だと考える力を列挙し、それらの関係を構造化するイメージマップを描いてもらい、個人々が重要と捉える項目や項目間の関係性及びそのように考える理由等を語ってもらった。そのインタビューの最中に、学生及び教員らが、当初描いた自身のイメージマップや「語り」の内容を修正ないし補足、時に否定する等の行動を見せた。また、事後のアンケートでは、イメージマップを使ったインタビューが自身の振り返りに非常に有益だったと、ほぼ全員がコメントした。すなわち、この調査において、教職へのアイデンティティと力量形成に関わる「省察」の深化の萌芽を感じた。

そこで、この調査を拡充し、複数の教員を対象に、より定期的・継続的にイメージマップを用いたインタビューを実施し、教員自身の「省察」の深化の過程を明らかにすること、次に、そこで得られた知見を基にして校内研修や現職研修といった場での教師自身の「省察」の深化を促すプログラムを開発することができる、と本研究代表・分担者らは考えるに至った。

2. 研究の目的

本研究は、現職教員の教職に対する省察 (reflection) に焦点を当てた研究である。そして、本研究の具体的な目的は、現職教員が、専門職の力量として求められる教職に対する「省察 reflection」(以下、「省察」)を深化させるプログラム(「省察深化プログラム」)を開発することだった。

3. 研究の方法

本研究は、「省察」に関する国内外の理論的動向を精査した知見を踏まえながら、すでに本研究代表・分担者らが開発し実施してきたイメージマップを活用したインタビューの手法を援用することで進められた。

4. 研究成果

本研究では、まず「省察」の研究動向の整理・検討を行った。国内外の関連文献を収集し、また、海外の学会に参加・発表することを通して、最近の研究動向の把握に努めた。こうした活動を行うことによって、「省察」を中心とした教職の専門的力量を問い直していく上で、「社会正義 (social justice)」の観点を欠かすことができないことが明らかとなった。

次に、上記の成果を踏まえた上で、大学生ないし大学院生(現職教員の院生も含む)の授業(講義ないし演習)に参加した学生・院生の「省察」の力量が深化する様相を分析・検討した。この活動は、プログラム開発のための基礎的調査として位置づけられる。

まず、研究代表・分担者ら全員で授業内容について検討し、「省察」と「社会正義」の観点を盛り込みながら授業計画を策定し、研究分担者である高谷が本務校(鹿児島大学)や研究代表者の森の本務校(大阪市立大学)にてその授業を集中講義等の形で実施した。そうした授業の様子を森等はビデオ撮影をするなどして記録した。

また、受講学生に実施した授業開始前と開始後のアンケート調査及び一部学生に対するインタビュー調査を実施し、データとしてまとめて全員で分析・検討した。

以上の結果、「社会正義」の観点を盛り込んだテーマを授業内容の中核に据え、グループワーク等を中心としたアクティヴ・ラーニングの形態を積極的に活用・展開することで、参加者の学びは飛躍的に深まり、教職に対する「省察」は大いに深化していくことが明らかになった。

こうした知見に基づいて、プログラムのプロトタイプを開発し、は、今後は現職教員を対象とした研究の場でも応用して発展する可能性があると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計7件)

諏訪英広・高谷哲也「教員評価における目標管理の運用実態に関する校長の認識」『兵庫教育大学研究紀要』, 査読無, 2016, 48, pp.129-140.

高谷哲也・原之園哲哉「学校を基盤とした教師の授業力向上に果たす教育行政の役割に関する一考察:鹿児島における『授業サポートプロジェクト』の事例より」『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』, 査読無, 6, 2016, pp.45-56.

深見俊崇「教員志望学生の学習評価力量の向上に資する講義の検討」『日本教育工学会研究報告集』, 査読無, 16(1), 2016, pp.179-184.

廣瀬真琴・宮橋小百合・木原俊行・森久佳・深見俊崇・矢野裕俊「新たな専門的な学習共同体のネットワーク化としての Instructional Rounds: 授業分析に基づいた学区の教育及び学校改革」大阪市立大学教育学会『教育学論集』, 査読有, 4, 2015, pp.17-29.

宮橋小百合「初年次教育におけるピア・リーダーのサポートとその評価: 地方私立大学における事例に基づいて」『和歌山大学教育学部教育実践センター紀要』, 査読無, 25, 2015, pp.49-56.

深見俊崇「1年次における教員志望学生の授業観察力量を向上させるためのカリキュラムデザイン」『日本教育工学会論文誌』, 査読有, 39(3), 2015, pp.201-208.

KIHARA Toshiyuki, YANO Hirotoshi, and MORI Hisayoshi. "Development of a New Curriculum Leadership Model with a Focus on Its Relation to the Professional Learning Communities." *Back to the Future: Legacies, Continuities and Changes in Educational Policy, Practice and Research* (M.A. Flores, A.A. Carvalho, F. I. Ferreira and M.T. Vilaça eds.), 査読有, 2013, pp.115-128.

〔学会発表〕(計9件)

廣瀬真琴・森久佳・木原俊行・深見俊崇・宮橋小百合「Instructional Roundsの我が国への導入可能性に関する検討」日本教育方法学会第51回大会, 2015年10月11日, 岩手大学教育学部(岩手県盛岡市)。

深見俊崇・木原俊行・小柳和喜雄・森久佳・島田希・廣瀬真琴・宮橋小百合「教師の感情研究と教師教育における諸概念との関係性」日本教育方法学会第51回大会, 2015年10月11日, 岩手大学教育学部(岩手県盛岡市)。

深見俊崇「教員志望学生のカリキュラム開発力量に資するワークブックの開発」

日本教育工学会第31回大会, 2015年9月21日, 電気通信大学(東京都調布市). 森久佳・小柳和喜雄・木原俊行「教師レジリエンスに関する研究動向」日本教師教育学会第25回研究大会, 2015年9月20日, 信州大学教育学部(長野県長野市). FUKAMI, Toshitaka. "Exploring the Development of Professional Skills in Curriculum Development in Japanese Schools." 17th BIENNIAL ISATT (International Study Association on Teachers and Teaching) CONFERENCE: 2015. 15/7/2015. University of Auckland (New Zealand).

深見俊崇, 木原俊行, 小柳和喜雄, 森久佳, 島田希, 廣瀬真琴, 宮橋小百合「教師の感情に関する研究動向」日本教育方法学会第50回大会, 2014年10月11日, 広島大学教育学部(広島県東広島市). 廣瀬真琴, 宮橋小百合, 木原俊行, 森久佳, 深見俊崇「専門的な学習共同体のネットワーク化の新展開: 米国における Instructional Round の分析を通して」日本教育方法学会第50回大会, 2014年10月11日, 広島大学教育学部(広島県東広島市).

MORI Hisayoshi, FUKAMI Toshitaka, and TAKATANI Tetsuya. "The Characteristics of the Image of the Teaching Profession held by Elementary School Teachers in Japan, Focusing on Their View of Their Professional Development." 16th BIENNIAL ISATT (International Study Association on Teachers and Teaching) CONFERENCE: 2013. 3/7/2013. University of Ghent (Belgium).

島田希, 廣瀬真琴, 深見俊崇, 森久佳, 高谷哲也, 宮橋小百合「小学校教員の力量観とその基盤となる経験の解明: イメージマップとインタビューの組み合わせを通じて」日本教育工学会研究会, 2013年5月18日, 長崎大学教育学部(長崎県長崎市).

[図書](計2件)

日本教育工学会監修, 木原俊行・寺島浩介・島田希編著, 深見俊崇他著, ミネルヴァ書房, 『教育工学的アプローチによる教師教育: 学び続ける教師を育てる・支える』, 2016, 225.

G・デー/Q・グー著, 小柳和喜雄・木原俊行監訳, 森久佳, 深見俊崇, 島田希, 高谷哲也, 宮橋小百合, 廣瀬真琴訳, 北大路書房, 『教師と学校のレジリエンス: 子どもの学びを支えるチーム力』, 2015, 245.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森 久佳 (MORI, Hisayoshi)
大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号: 004113287

(2) 研究分担者

高谷 哲也 (TAKATANI, Tetsuya)
鹿児島大学・教育学部・准教授
研究者番号: 00464595

島田 希 (SHIMADA, Nozomi)
高知大学・人文社会・教育科学系・講師
研究者番号: 40506713

廣瀬 真琴 (HIROSE, Makoto)
鹿児島大学・教育学部・准教授
研究者番号: 70530913

宮橋 小百合 (MIYAHASHI, Sayuri)
和歌山大学・教育学部・准教授
研究者番号: 80461375

深見 俊崇 (FUKAMI, Toshitaka)
島根大学・教育学部・准教授
研究者番号: 80510502

(3) 連携研究者

内藤 由佳子 (NAITO, Yukako)
甲南女子大学・人間科学部・准教授
研究者番号: 80421353